



認知症月間特別講座「認知症とともに生きる」 (2024年9月10日開催)

「認知症の人の対応に困る」という話を良く聴きます。ただ、認知症の人たちは、本当に困らせようとして様々な行動をしているのでしょうか？一見不可解な行動にも必ず理由があります。この講座では、単に対応方法の講義ではなく、認知症の「なぜ？」をみんなで考えて、参加していただいた皆様が“認知症の世界”の理解を深めることをねらいとして開催しました。

【あなたの知らない認知症の世界】

参加者から寄せられたお悩みについて、動画配信「あなたの知らない認知症の世界」さながら、パーソナリティとともにゲストが「なぜ」を考えました。

今回のお悩みの一つは、「家にいるのに家に帰りたい」。なぜ、そのようなことが起こるのでしょうか。

中核症状として失見当識が考えられるなかで、本人にとって、「家(House/物理的な家)」=「家(Home/我が家、拠り所となる場所)」なのでしょう。仮に本人に「家(Home)」で果たしたい役割があるとすれば、「妻として仕事から帰ってくる夫にご飯をつくっておきたい」のかもしれないし、「母親として子どもが心配なので家に帰りたい」のかもしれない。すぐに対処法を考える前に、まずは本人の気持ちに寄り添い、本人の声に耳を傾けることが大切である。本人がそのままの自分でそこにいてよいと感じられるよう、本人の想いに沿った「家(Home)」での役割を作ることも一つの方法とゲストからお話がありました。



パーソナリティの玉井さん(左)と
ゲストの田島さん(中)、小川さん(右)

【一つの問いにたくさんの答え】

グループワークでは「なぜ、夏場に厚着してしまうのか」がテーマ。参加者一人ひとりが解説者となり、その理由を話し合い、みんなで「なぜ」の可能性を考え抜きました。「たくさん服を持っているから」、「その服装が好きだから」、「エアコンが寒いから」、「昔、ファッションリーダーだったから」など一つの問いにたくさんの答え。本人目線で「なぜ」を考えてみると、さまざまな可能性が考えつくことが分かりました。



本人目線で考え抜く参加者たち

【認知症の「なぜ」を考えてみることで症状を改善できるカギ】

私たちは、本人を目の前にして、ついつい先に問題行動への対処法を考えてしまっていないだろうか。そして、先回りしようとするあまり、本人が言葉や行動で必死に伝えようとしているメッセージを見落としていないだろうか。

まとめにあたって、パーソナリティの玉井さんは、まずは「なぜ」について本人目線で考えてみることで、次に本人の価値観、大事にしている人や事柄を踏まえて推理してみることが大切と話していました。問いに対する答えは一つではない。認知症の「なぜ」を考えてみる第一歩が、私たちの関わりでできること、つまり医療ではない方法で症状を改善できるカギになるかもしれないと講座を結ばれました。